

「平和の俳句 4」

2015年03月31日

安倍政権は憲法9条を全く黒塗りにしてしまっている。自衛隊をいつでもどこでも派遣する体制を作り上げようとしている。ガイドライン、安保法整備は国会で議論もされていないのに、米国に行って、それらの決議日程を明言し、米国からの賛辞に得々としている。自民党の政治家たちは国民を無視し、米国の方ばかりを向いている。沖縄の翁長県知事は辺野古工事に待ったをかけているが、政府は沖縄県民の強い意志を表した選挙結果に耳を背け、対話もしようとせず、工事を進めている。これが国を預かる政治家のすることであらうか。「東京新聞」が連載している3月の「平和の俳句」から紹介したい。

「曲り角曲っちゃったの？冬の月 林圭子(54)」<いとうせいこう 知らぬ間に月が勝手に曲がって行ってしまっていないか。自分もまた、迷い道を歩き出してはいないか。そんな不安で空を見上げる。> 月は勝手に曲がることはないだろう。政治が勝手に戦争をする国に捻じ曲げてしまう。止めてくれ。「去年(こぞ)今年貫く平和砕けけり 石崎(土の下に口)彦(75)」<いとうせいこう 貫くその棒のような時間の持続をやすやすと破壊する者への慨嘆。> <金子兜太 九条をいじりまわして、長くつづいた平和をぶちこわしにするのか！？> 70年、平和を守ってきた。それが、あつと言う間に砕かれてしまう。こんな恐ろしいことはない。

可愛い句もある。「乳飲み子は仕草(しぐさ)に平和を宿して 浜本忠志(77)」<いとうせいこう 赤ん坊のする格好ひとつひとつ、人を安らがせる。攻撃心を解く術。> <金子兜太 生まれたばかりの子供は平和の塊である。乳飲み子に学べ。> 子どもはコスモポリタンと言われる。大人は力を奢るから平和を構築できないのだ。「一人の手なにもできないかわいい手 玉置(たまき)小桜(こはる)(9)」<いとうせいこう 無力だと思える一人の手。けれども、その手こそがかわいいと小学三年生が言う。はつとした。強いことだけが力ではない。愛らしさも。> 9歳の女の子、小桜ちゃんが自分の手を見て詠んだのであろう。私の手は可愛くはないが、可能な限り、集会に参加し、署名している。何もできない無力感はあるが、やらざるを得ない。「国政に異議申したつ女の輪 沢野三枝子(66)」<いとうせいこう 女性たちが集団的自衛権行使容認に反対し、議事堂を囲んだ。その時の参加者の一句。事実しか書かれていない。だからこそその力強さ。> 私も妻に連れられて赤い鞆を持って参加した。女性スピーカーが「世で出ているといわれる女性たちは、男性より男性的な人たちである」という言葉に、自民党の女性閣僚たちを思い出した。

スケールの大きい平和の句もある。「天の川戦の果てぬ星ひとつ 浅井英治(81)」<金子兜太 戦争のつづく地球というこの星。天の川の流れは美しく、みな戦争の影はないのに、なぜ地球だけが戦争を止められないのか。> 「冬銀河許し合う日の来たるまで 桜井光(28)」<いとうせいこう 大きな一句。その日が遠い未来かどうかは地球人のわれわれが導くこと。> <金子兜太 許し合える日を待つ気持ち。平和の喜び。冬空の銀河のように広々と。> 宇宙的な視点で世界を見ると、戦争の愚かさが見えてくるに違いない。人間は小さな地球で、運命を共にしているのだから、平和に過ごしたい。

「この平和三百万の骨の上 富井哲(さとる)(73)」<金子兜太 戦後七十年、とにかく平和に暮らしていただけるのも、三百万におよぶ人々の犠牲による。その方たちの骨に謝し、平和の尊さを想え。> 無謀な戦争に走り、300万人の命を失った。彼らの犠牲の上で平和を味わってきた。しかし、アジアでは2千万人以上の人々が無残に殺されていった。加害の認識が、罪責を深め、そこから真の平和が作られていく。過ちの事実を直視し、謝罪して、新たになっていく決意が憲法9条であったはずである。